

先週の講壇から

「種を蒔く人」

コリント人への第IIの手紙 9章6節～15節

聖句「種を蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる方は、あなたがたに種を与えて、…あなたがたの慈しみが結ぶ実を成長させてくださいます。」(9:10)

1. 《不稔障害》 この夏は「命に関わる危険な暑さ」に戦々恐々でしたが、農家にとっては冷夏も心配です。冷害によって稲が不稔となった1993年の大凶作では、政府がタイ米の緊急輸入に踏み切りました。しかし、国産米が供給され始めると、タイ米が公園に捨てられたりして、むしろ日本国民の心の在り方が心配になりました。実りが入っていないのは、私たちの生き方なのではないでしょうか。
2. 《刈り入れ》 経済的な豊かさ、裕福さ、健康で長生き、幸せな家庭、安定した生活が「人生の実り」でしょうか。それらを求めることを誰が咎め立て出来るのでしょうか。でも、それが即ち「実り」ではありません。自身が味わい楽しむことが出来るものではなく、他の誰かに残すことの出来るものが本当の「実り」です。稲は刈り取られますが、米は残るのです。「惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです」と、パウロは言いますが、「蒔く人」と「刈り取る人」とが同じであるとは限りません。むしろ、人生においては違っている場合が多いのです。教会形成においても「一杯蒔いたから、一杯収穫がある。一杯刈り入れよう」と考えるのは邪道なのです。それは自分に仕えることです。
3. 《未来の芽》 「蒔く」という漢字を見る度に「蒔くに時あり」と思います。成長には時間がかかるのです。植物が生長して実りをもたらすまでには時間がかかります。不作か豊作かを見極めるのにも時間がかかります。ワンタッチ、インスタント、手間要らずの製品に囲まれている私たちは、手間暇のかかることが苦手になって、手間暇のかかる事柄が世の中には沢山あるという当たり前の事実も忘れてしまいます。神は手間暇をかけて私たちを造って下さったのです。ワンタッチやインスタントに愛はありません。愛することには手間暇がかかるのです。それをパウロは「あなたがたの慈しみが結ぶ実」と呼んでいます。種の中には、未来が宿っています。種は今の時に属しているではありません。私たちは実りを味わうことは出来ないかも知れません。でも、それだから良いのです。

朝日研一朗牧師